

瀬戸内町における集落空間の形成について

鼎 丈太郎

I はじめに

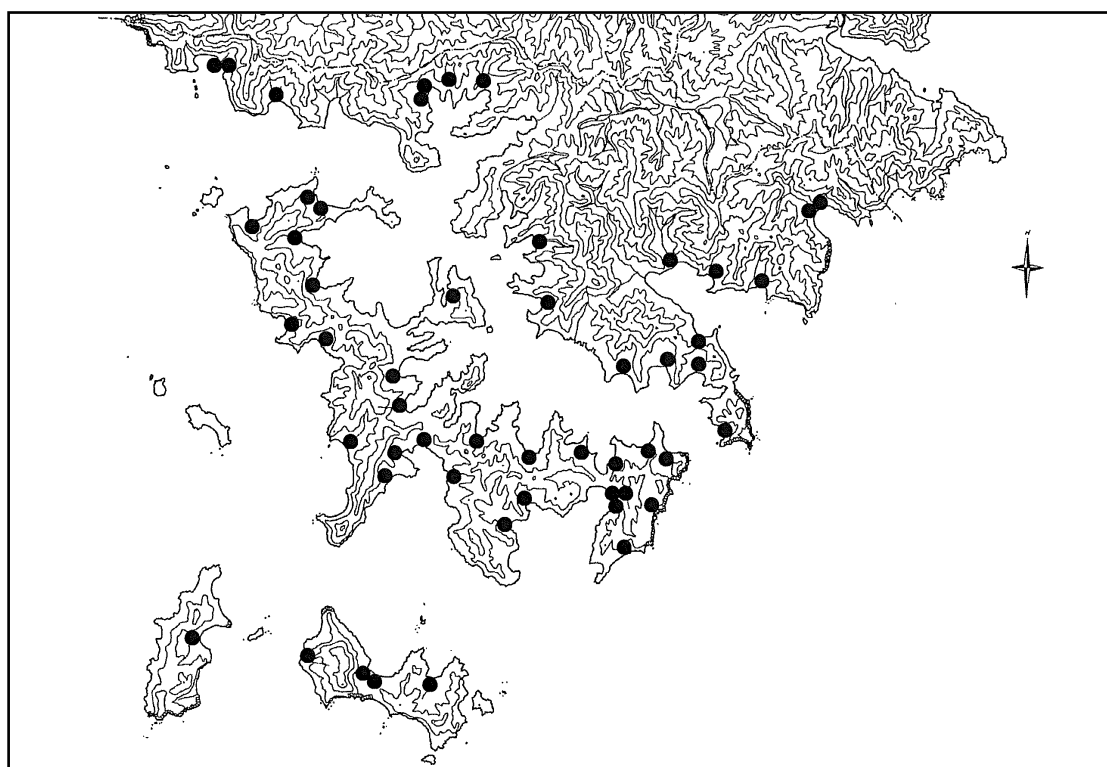
瀬戸内町教育委員会では、平成 15（2003）年度から町内の埋蔵文化財詳細分布調査を実施継続している。分布調査の進捗状況は、町域平野部の約七割程度であるが、平成 23（2011）年度までに遺跡及び遺物散布地を 52 箇所確認している（第 1 図）。

現段階での調査成果から、瀬戸内町における遺跡の立地条件について『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』で時代ごとに類型化を試み、遺跡の立地条件の傾向を提示した。そこで、今回は提示された時代ごとの遺跡分布や立地の傾向から、現在の集落空間が形成されたのはいつ頃で、その要因と考えられるものは何かを推測してみたい。

II 各時期の遺跡分布

瀬戸内町全体の遺跡分布は、第 1 図 瀬戸内町遺跡分布図に記載のとおりである。分布図を概観してみると、遺跡が瀬戸内町全域に分布しており、現在の集落とほぼ一致している事が解る。

そこで、遺跡の分布が時代ごとにどのように変化するか、縄文時代から近世までを 4 期に分け、各時代における遺跡の分布傾向を確認してみたい。



第 1 図 瀬戸内町遺跡分布図

<縄文時代相当期>（第2図）

狩猟・採集の生活を行っていたと考えられる縄文時代相当期では、沖縄諸島と共通した特徴をもつ土器を使用している。瀬戸内町では、標識土器である嘉徳式土器が出土した「嘉徳遺跡」や条痕文土器が採集された「安脚場遺跡」など、6遺跡が確認されている。

この時期の遺跡分布は、6遺跡とも瀬戸内町の東側に存在しており、その内の5遺跡が外洋側に存在している。残りの1箇所は、大島海峡内で確認されているが、小破片の土器のみが採集されており、時代の特定が困難である。そのため、当該時期の遺物でない可能性もある。



第2図 瀬戸内町遺跡分布図（縄文時代相当期）

<弥生時代～古墳時代相当期>（第3図）

日本列島では、稲作が本格的に開始され、国家の体制が整い始めた時期である。奄美群島では、九州などと大型巻貝（ゴホウラ・イモガイなど）を介した交流が開始されたと考えられ、在地土器が九州地方の土器の特徴を持つようになる。

この時期の遺跡は、7箇所確認されている。遺跡の分布を概観してみると、請島・与路島の両島にも遺跡が確認されるようになり、縄文時代相当期のような瀬戸内町の東側に偏るといった傾向はみられない。しかし、外洋側に遺跡が形成され大島海峡内に遺跡が形成されないという点では縄文時代相当期と同様である。



第3図 瀬戸内町遺跡分布図（弥生時代～古墳時代相当期）

＜飛鳥時代～平安時代前期相当期＞（第4図）

文献史学の成果によると、南西諸島の島々や物産が文献に多く登場し、九州などとの交流が伺える時期である。しかし、在地土器の特徴は、南九州の特徴よりも在地の特徴が強くなり、沖縄諸島の土器様相と再び類似するようになる。

この時期の遺跡は、11箇所確認されており、兼久式土器やヤコウガイなどが確認されている。当該時期は、遺跡の近辺で干潮時にリーフ（瀬）が出る地域が大半であり、リーフ（瀬）は遺跡形成の条件の一つである可能性が高い。そのため、皆津崎のような狭い土地でも遺跡が存在したのだと考えられる。なお、この時期も外洋側に遺跡が形成される傾向がみられる。

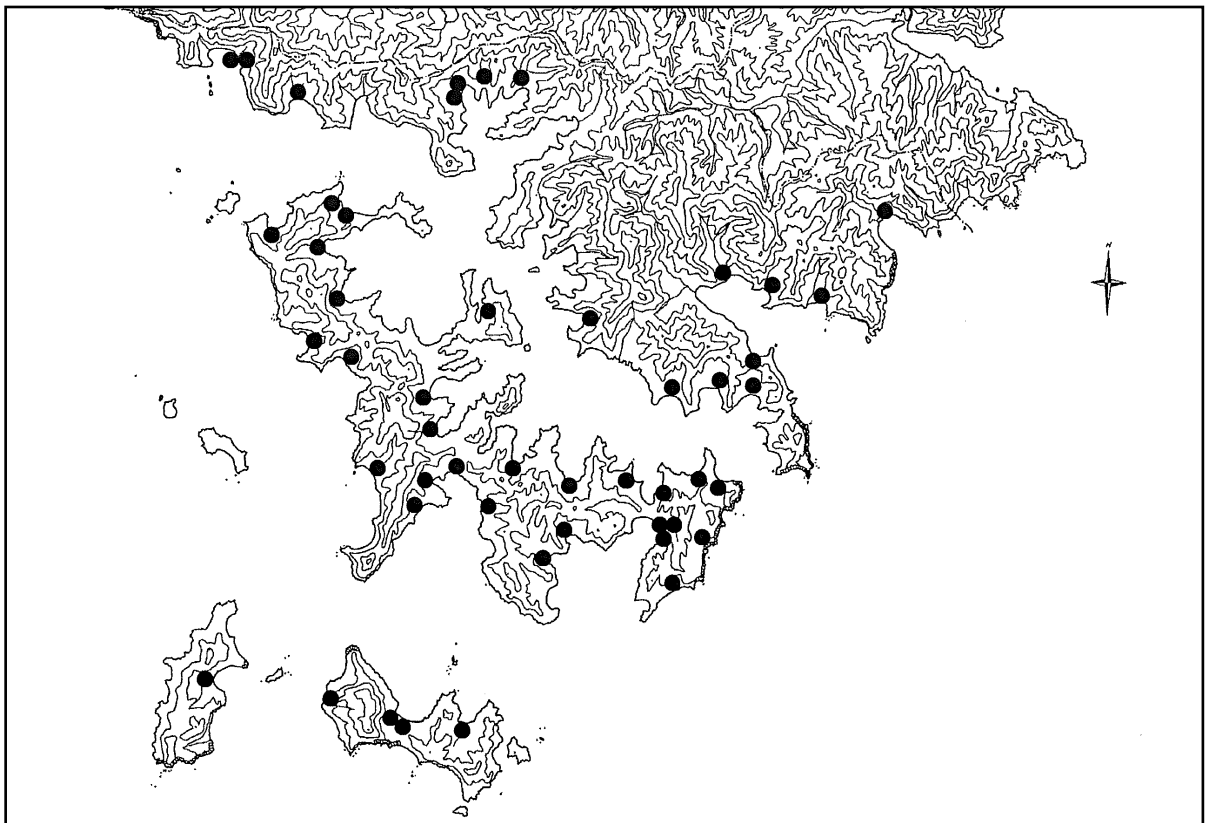
＜平安時代後期～江戸時代＞（第5図）

日本列島では、国家領域が現在と変わらないほど広大になり、沖縄諸島では琉球国が成立し国家の体制が整う時期である。奄美群島では、在地土器が殆ど使用されなくなり、カムイヤキや陶磁器など大量生産された焼物が流通・使用されている。

奄美群島では、この時期を出土遺物から、カムイヤキの盛行する時期、琉球国統治の時期、薩摩藩統治の時期の3期に細分することが可能であるが、細分された各時期の遺跡分布や立地は、ほぼ同地点に存在している。よって、今回は、この時期を南西諸島における国家成立の時期と捉え、細分を行わず同時期として考えることとする。



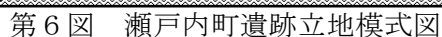
第4図 瀬戸内町遺跡分布図（飛鳥時代～平安時代前期相当期）



第5図 瀬戸内町遺跡分布図（平安時代後期～江戸時代相当期）

以上、各時期の遺跡分布を概観してみたが、遺跡の形成には時期ごとに一定の条件が存在し、その条件に見合う地域を人々が選択していたことが解る。また、人々が現在の集落とほぼ変わらない地域に住み始めるのは、遺跡の分布状況から平安時代後期～江戸時代相当期だと推測できる。

前節で、瀬戸内町全域を視野に入れた遺跡分布を確認したが、本節ではより狭い範囲での遺跡立地の変化を確認してみたい。そのために、第6図のような集落空間の模式図を作成した。各時期により、遺跡立地がどのように変化するのか確認してみたい。



＜縄文時代相当期＞

— 35 —

ないか、形成途中であったと考えられる。そのため、新砂丘上では遺跡が確認されておらず、遺跡の多くは古砂丘上に存在する。すべての遺跡が山裾及び河川付近に立地している点は興味深い。

< 弥生時代～古墳時代相当期 >

弥生時代～古墳時代相当期にあたる遺跡は、7箇所確認されている。この時期の遺跡はすべて新砂丘上に存在している。また、遺跡前面の海は砂地の海底が多く、ゴホウラが獲れる地域が多い。縄文時代相当期と重複する遺跡は存在しない。

< 飛鳥時代～平安時代前期相当期 >

飛鳥時代～平安時代前期相当期の遺跡は、11箇所確認されている。この時期の遺跡もすべて新砂丘上に存在する。弥生時代～古墳時代相当期の遺跡と重複する遺跡は、4箇所存在し、立地条件が近似していると考えられるが、この時期の遺跡は、弥生時代～古墳時代相当期の遺跡と比較すると遺物の散布範囲が広大になる傾向がある。また、砂丘のトップから山側（湿地側）に遺跡が形成される傾向がみられる。

< 平安時代後期～江戸時代相当期 >

平安時代後期～江戸時代相当期にあたる遺跡は、47箇所確認されている。この時期の遺跡は、集落空間全面で確認されるが、その多くは砂丘（古砂丘・新砂丘）上に位置し、有力者の屋敷跡や祭祀空間に特に遺物が集中して確認される傾向がみられる。

以上、集落空間内の遺跡立地も各時期により変化が確認できる。また、集落空間内の遺跡立地からも現在の集落と殆ど変わらない地域に住み始めるのは、平安時代後期～江戸時代相当期であったと推測できる。

IV 瀬戸内町における遺跡分布及び遺跡立地について

前節までに、瀬戸内町の遺跡分布及び遺跡立地について、瀬戸内町全域と集落空間の視点から検討を行った。その結果、各時期によって遺跡分布及び遺跡立地が変化することが確認できた。それでは、各時期の遺跡立地の傾向をまとめてみたい。

< 縄文時代相当期 >

遺跡は、瀬戸内町の東部に集中する傾向がみられる。遺跡の立地は、外洋側の沖積低地及び古砂丘上で、河川付近の山裾に形成される傾向がある。

縄文時代相当期では、狩猟・採集を中心に生活を行っていたと考えられ、遺跡の立地条件として、山や海、河川・泉に近い平地であることが条件であったと考えられる。新砂丘は形成されていないか形成途中であった。そのため、山裾の平地を居住空間に選択したのではないかと考えられる。

< 弥生時代～古墳時代相当期 >

遺跡は、外洋側の新砂丘上に形成される傾向がみられ、遺跡が立地する前面の海では現在でもゴホウラが獲れる地域が多い。

弥生時代～古墳時代相当期では、縄文時代相当期と同様、狩猟・採集の生活を行っていたと考えられるが、西日本で南海産大型巻貝（ゴホウラ・イモガイ）の需要が増え、対外交流が盛んになったため、ゴホウラが生息している地域で交易拠点となり易い外洋側の湾に居住したのではないかと考えられる。

この時期、沖縄諸島ではゴホウラやイモガイの集積が確認されており、奄美群島の人々が中継交易を行っていたと考えられているが、今後、瀬戸内町でも腕輪未製品など南海産大型巻貝の集積が発見される可能性がある。

＜飛鳥時代～平安時代前期相当期＞

遺跡は、外洋側の新砂丘に形成される傾向がみられ、弥生時代～古墳時代相当期の遺跡よりも遺物の散布範囲は広いことが多い。また、遺跡の立地は新砂丘の中でも砂丘のトップより山側（湿地側）である傾向がみられる。

奄美群島では、飛鳥時代～平安時代前期相当期においても、狩猟・採集の生活を継続していたと考えられている。日本列島では仏教が伝来し、螺鈿などの工芸品の製作が開始された。それに伴い、ゴホウラやイモガイの需要は激減し、ヤコウガイの需要が増加したと推測される。奄美群島を中心にヤコウガイが大量に出土する遺跡が出現するのはこの時期である。瀬戸内町でもこの時期の遺跡からはヤコウガイが見うけられ、遺跡もヤコウガイの生息域であるリーフ（瀬）の近くに立地する傾向がみられる。

＜平安時代後期～江戸時代相当期＞

遺跡は、外洋側だけでなく大島海峡内でも確認されるようになり、瀬戸内町全域に分布するようになる。遺跡の立地についても、現在の集落と重複する傾向がみられる。

平安時代後期～江戸時代相当期の奄美群島は、琉球国や薩摩藩の境界地域となる。稲作も始まり、外洋側だけでなく海峡内にも居住空間が形成されるようになる。遺物の散布は広範囲におよぶが、有力者の屋敷跡や祭祀空間に集中する傾向がみられる。このことから、陶磁器などの交易品の多くは、有力者が所有していた可能性が考えられる。なお、カムイヤキの散布地と青磁など中国貿易陶磁器の散布地、そして薩摩焼の散布地が有力者の屋敷跡や祭祀空間に重なる傾向がみられることから、国家領域が変化しても有力者の居住する地点や立地条件は変化しなかった可能性が推測される。

当該時期は、それ以前の時期と比較すると遺跡の分布と立地の状況が相違する。それまで外洋側でしか遺跡は分布していなかったが、当該時期より大島海峡内でも遺跡が確認されるようになる。また、現在の集落とほぼ同じ地点に遺跡が立地するのも当該時期からであり、有力者や祭祀空間に遺物が集中するなど、現在の集落空間と遺跡が密接にリンクしている傾向も見受けられる。

これらのことから、現在の集落が形成され始めたのはこの時期であると推測できる。

V 現在の集落空間の形成の要因について

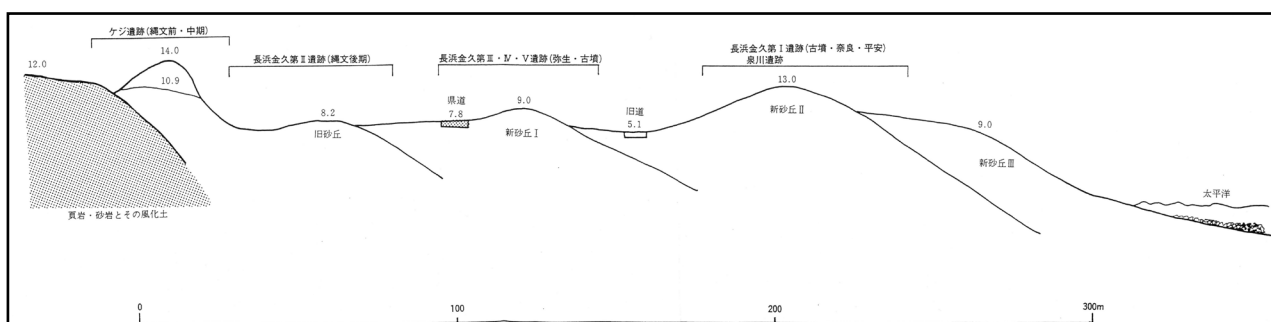
瀬戸内町の遺跡分布及び遺跡立地について、瀬戸内町全域と集落空間の視点から検討を行った。その結果、現在の集落空間が形成されたのは平安時代後期～江戸時代相当期である可能性が高いことが推測できたが、今節ではその要因と考えられるものが何か検討を行いたい。

検討を行うにあたって、対象時期を設定しなければならない。現在の集落空間が形成され始めたのは平安時代後期～江戸時代相当期であると推測できたわけだが、その変化・要因を考える上ではその直前の時期である飛鳥時代～平安時代前期相当期からの変化を追わなければならない。

飛鳥時代～平安時代前期相当期の主な出土遺物は、兼久式土器である。ヤコウガイを大量に集積し交易を行っていたと考えられる時期である。遺跡は、ほとんどが砂丘地に立地しており、単一文

化層の遺跡が多い。それは、砂丘の形成が垂直方向ではなく海の方に向かって形成されるからだと考えられる。

これら砂丘上の遺跡立地については、弥栄久志氏が『長浜金久・ケジ・泉川遺跡』で砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図（第7図）を示し、砂丘の形成によって生活域が海側へ移動していくことを説明している（弥栄 1987）。なお、1990年に鹿児島県教育委員会が調査した『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ』でも遺跡の立地条件の類型化が行われており（長野・富田 1990）、2005年の瀬戸内町教育委員会の報告でも遺跡の立地が、古砂丘から新砂丘へと移動することが報告されている（県 2005）。



第7図 砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図（弥栄 1987）

これらの報告から奄美群島の遺跡は、時代が新しいほど海岸線の近くに立地していることがわかる。砂丘の形成に合わせて生活の場を移動させ、常に海の近くで生活していたのであろう。

しかし、近年の発掘成果として徳之島や沖永良部島で内陸部赤土丘陵上から出土する兼久式土器が発見された。このことは、前述の報告・傾向と相違しており、徳之島や沖永良部島では、平安時代頃に海岸砂丘から内陸部赤土丘陵上へ遺跡が移動する可能性が考えられるのである。

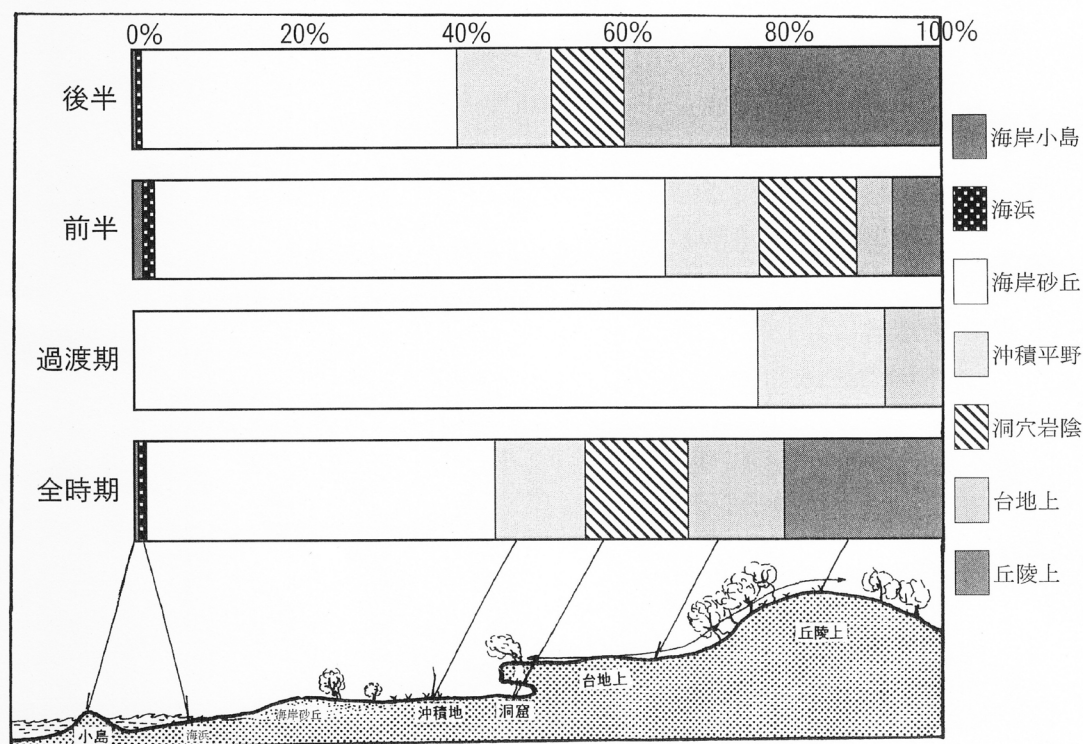
これらの遺跡から出土する土器群は、底部に本葉圧痕を残す資料があることから、兼久式土器に含まれる資料であると考えられるが、兼久式土器に特徴的な刻目突帯文を施す資料は少ない。なお、これらの土器群の年代は、伊仙町川嶺辻遺跡出土土器で10世紀前後とされており、まさに今回問題としている飛鳥時代～平安時代前期相当期の終末期に該当する。

それでは、なぜこれらの遺跡が丘陵上に移動しているのか、沖縄に同様の事例があるので、沖縄の状況をまとめてみたい。

沖縄編年の貝塚後期土器の遺跡立地は、2000年6月に宮城氏（宮城 2000）が、2000年10月に岸本氏他がまとめている（岸本 2000）。宮城氏の論文より遺跡立地の傾向を以下にまとめてみる。

- 沖縄後期の遺跡は、大半は海岸砂丘地に選地している。前半期には、海岸砂丘地（約63%）丘陵上・台地上（10%未満）の立地。後半期では丘陵上への選地が約25%を占めるとともに、台地上・洞穴・沖積地への立地も10%前後となる（第8図）。ただし、低島と高島などの相違があり、情報を一括して単純に述べるのには危険性がある。
- 沖縄本島内の遺跡集中地として、本島北端国頭村辺戸岬東海岸、本部半島北海岸、金武湾南の沿岸部、読谷村～北谷町の周辺、糸満市の西海岸、本島南端の東海岸の6つの地域で顕著である。

- 河川沿いに密に分布する例があり、上流域の内陸部にまで遺跡が分布している。
- 砂丘列の尾根に並行する形で貝塚及び貝塚群を形成し、層位的堆積に恵まれず単一文化層を形成する例が多い。このような発掘調査の現状は奄美地域の新砂丘遺跡においても同様である。
- 砂丘遺跡が多いのは、主な生活域が砂丘地に限られた亜熱帯地域、島嶼部の一つの特徴として捕らえることができる。
- 丘陵上及びその崖下に形成される遺跡が各地域に点在する。著名な遺跡を列記すると、勝連城南貝塚、フェンサ城貝塚などがある。後続するグスク時代遺跡とオーバーラップして選地することから、これらの土器群がグスク時代直前の土器型式として認知されている。
- 砂丘遺跡→洞穴遺跡→丘陵上遺跡への立地から見た後期遺跡の展開。
- 後半期における遺跡の内陸部展開については、グスク時代直前の時代として捉えるなら当然の状況であろう。得に後半期において傾向が顕著になるのは前述したとおりである。按司出現の契機は8～12世紀とされており、この頃に農耕が開始した可能性もある。
- 近年、那崎原遺跡では鋤跡+溝跡遺構と米・大麦・小麦・豆・タデ料などの種子遺体がセットで出土している、あわせてナガラ原東貝塚の調査で炭化米が検出されている（那崎原遺跡については現段階では否定的である）（高宮 2004）。



第8図 沖縄貝塚時代後期の遺跡立地（宮城 2000）

宮城氏は、各研究や報告書をまとめ、沖縄貝塚時代後期遺跡の大半が砂丘地に立地するとしている。しかし、後期後半期になると内陸部への展開も見られるとしている。この内陸部への移動については、後続するグスク時代遺跡とのオーバーラップや、農耕の可能性を示唆している。

沖縄諸島での遺跡立地では、沖縄貝塚時代後期後半期（平安時代前期）において内陸部への移動

が見受けられ、グスク時代への移行や農耕の可能性も指摘されている点が注目される。低島と高島など今後も検討しなければならない問題は多いが、グスク時代との関連性や農耕開始の可能性は大変興味深い。

以上、宮城氏の論文をもとに沖縄諸島の沖縄貝塚時代における遺跡立地をまとめてみた。徳之島や沖永良部島で見られる内陸部赤土台地上の遺跡は、沖縄貝塚時代後期後半遺跡の立地と同様であると見ることができるであろう。

こうした遺跡の立地変化は、これまでの兼久式土器の遺跡立地（第7図）とは相違した傾向である。奄美群島北部では海岸に隣接する砂丘上で遺跡は発見されるが、奄美群島南部では少し内陸部の赤土丘陵上で発見される事例がある。このような内陸部への移動傾向は、当該時期の沖縄諸島においても同様の傾向が見られた。沖縄諸島の研究成果では、遺跡立地が変化する要因としてグスク時代の遺跡への展開や農耕の可能性などが指摘されている。なお、これら内陸部赤土台地上の遺跡からは、奄美群島北部の兼久式土器出土遺跡と比較するとヤコウガイの出土量が非常に少ない。ヤコウガイ以外の貝類は出土していることから土壌的な問題でヤコウガイの出土例が少ないのではなく、ヤコウガイ大量出土遺跡のように意図的にヤコウガイを捕獲する生活を営んでいない可能性がある。このことは、沖縄諸島においても同様の傾向が見られるようである。

なお、平安時代後期の遺物であるカムイヤキが南西諸島全域に広まった最初の遺物であるが、飛鳥時代～平安時代前期相当期以前でも交易の可能性は指摘されている。集落空間形成の要因として、交易は一つの要因ではあるが、主要な要因では無いと考えられる。

VI おわりに

以上、瀬戸内町における集落空間の形成について、時代ごとの遺跡分布や立地傾向について検討を行ってみた。検討の結果、各時期で遺跡の分布や立地が変化することが確認できた。それは、各時期で生活様式や対外交流が変化していて、それに伴い遺跡が立地する条件にも変化が生じたからである。なお、現在の集落と殆ど変わらない地点に人が住み始めるのは、平安時代後期～江戸時代相当期であると考えられる。

また、現集落の地点に人が住み始める主な要因を考える上で、飛鳥時代～平安時代前期相当期での変化を検討してみたが、奄美群島南部の遺跡が海岸砂丘上から内陸部赤土丘陵上に移動する傾向が見受けられることや沖縄諸島の研究成果から、グスク時代への展開や農耕の開始の可能性などが主な要因であると推測することができた。

平安時代前期以前、奄美群島で生活を営んでいた人々は、海洋資源特にサンゴ礁への依存度が高いため海に近い砂丘地を生活地として選択していた。そのため、外洋側に多くの遺跡が形成されたのではないかと考えられる。その後、雑穀栽培など農耕が開始されると、海洋資源への依存度が低くなり、台風や津波などの自然災害や外敵から身を守りやすい内陸部丘陵上や大島海峡内へと生活地を移動させていったのではないかと考えられる。また、グスク時代への展開が推測される点は、集落の有力者屋敷跡や祭祀空間に遺物が集中する事実とも矛盾は生じない。

今回、確認できた傾向は、奄美大島の南部地域で同様の傾向が見られるのではないかと考えられ

る。しかし、瀬戸内町域平野部の約七割のみの表面採集資料をもとに検討を行っている点など注意すべき点もあり、今後も調査・検討を継続し解決しなければならない問題は多い。

本稿は、2011 年次日本島嶼学会徳之島大会の研究発表に加筆・修正を加えたものである。

引用・参考文献

- 池畑耕一 1984 『あやまる第2貝塚－笠利町文化財報告No.7－』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 伊藤慎二 2000 『琉球縄文文化の基礎的研究』
- 伊藤慎二 2010 「ヒトはいつどのように琉球列島に定着したのか？」
『考古学ジャーナル』3月号No.597
- 牛ノ浜修・堂込秀人 1983 『面縄第1. 第2貝塚』鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 内山省吾 1983 『コビロ遺跡－研究室活動報告15－』熊本大学文学部考古学研究室
- 大西智和 1997 「奄美諸島における兼久式土器分類のための基礎作業」『南日本文化』第30号
鹿児島短期大学附属南日本文化研究所
- 小倉卓 1997 『用見崎遺跡Ⅳ－研究活動報告33－』熊本大学文学部考古学研究室－
- 小畑弘己・辻満久 1981 『宇宿港遺跡－研究室活動報告－10』
- 鼎丈太郎 2001 「奄美における兼久式土器の基礎的研究～小湊・フワガネク（外金久）遺跡を中心
(2008) に～」『瀬戸内町立図書館・郷土館紀要』第3号瀬戸内町立図書館・郷土館
※平成13年(2001)琉球大学修士論文
- 鼎丈太郎 2010 「奄美における兼久式土器の基礎的研究2」『瀬戸内町立図書館・郷土館紀要』
第5号瀬戸内町立図書館・郷土館
- 鼎丈太郎 2011 「揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付け」『揚殿遺跡』知名町教育委員会
- 鼎丈太郎 2011 「奄美における兼久式土器の基礎的研究3」『瀬戸内町立図書館・郷土館紀要』
第6号瀬戸内町立図書館・郷土館
- 鼎丈太郎 2011 「瀬戸内町におけるムラ以前のこと」『日本島嶼学会徳之島大会研究発表要旨集』
- 河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の編年について」『琉大史学』琉球大学史学会
- 河口貞徳 1978 『サウチ遺跡』笠利町教育委員会
- 河口貞徳 1996 「兼久式土器」『日本土器事典』
- 菅浩伸 2010 「琉球列島におけるサンゴ礁の形成史」『考古学ジャーナル』3月号No.597
- 岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2000 「沖縄編年後期の土器様相について」
『高宮廣衛先生古希記念論集』
- 木下尚子 2003 『先史琉球の生業と交易 改訂版』熊本大学文学部
- 木下尚子 2006 『先史琉球の生業と交易 2』熊本大学文学部
- 具志堅亮 2011 「天城町内の遺跡の概要」『日本島嶼学会徳之島大会研究発表要旨集』
- 島袋春美 2010 「先史時代の貝類利用－奄美・沖縄諸島を中心に－」『考古学ジャーナル』3月号No.597
- 新里亮人 2010 『川嶺辻遺跡』伊仙町教育委員会
- 新里亮人 2010 「琉球列島の農耕をめぐる諸問題」『考古学ジャーナル』3月号No.597
- 新里亮人 2011 「考古学からみた奄美諸島の歴史」『日本島嶼学会徳之島大会研究発表要旨集』

- 新里貴之 2004 「沖縄諸島の土器」『考古資料大観』第12巻小学館
- 新里貴之 2010 「中部琉球圏先史時代の社会の変遷」『考古学ジャーナル』3月号No.597
- 高梨修 1993 「琉球弧・奄美諸島におけるいわゆる「兼久式土器」研究の基礎的方針」
『法政考古学』第20集記念論集
- 高梨修 1995 『シンポジウムよみがえる古代の奄美』「マツノト遺跡出土の土器と編年」
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会
- 高梨修 1998 「名瀬市小湊・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査」
『鹿児島県考古学会研究発表資料－平成10年度－』
- 高梨修 1999a 『第2回奄美博物館シンポジウムサンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイ
をめぐる考古学・歴史学－』名瀬市教育委員会
- 高梨修 1999b 『奄美大島名瀬市 小湊・フワガネク（外金久）遺跡－学校法人日章学園「奄美看護
福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査概報－』名瀬市教育委員会
- 高梨修 2000a 「ヤコウガイ交易の考古学－奈良～平安時代並行期の奄美諸島、沖縄諸島における島
嶼社会－」『交流の考古学』朝倉書店
- 高梨修 2000b 「いわゆる兼久式土器と土盛マツノト遺跡出土土器の比較検討」
『奄美博物館研究紀要』第5号名瀬市立奄美博物館
- 高梨修 2004 「奄美諸島の土器」『考古資料大観』第12巻小学館
- 高梨修 2005a 「小湊フワガネク遺跡群第一次・第二次調査出土土器の分類と編年」
『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』名瀬市教育委員会
- 高梨修 2005b 「第二章 兼久式土器の分類と編年」『ヤコウガイの考古学』同成社
- 高梨修 2007 「南島の歴史的段階－兼久式土器出土遺跡の再検討－」『東アジアの古代文化』
- 高宮廣衛 1990 『先史古代の沖縄』
- 高宮広土 2005 『島の先史学パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代』
- 高宮広土 2010 「南西諸島の先史学」『考古学ジャーナル』3月号No.597
- 高宮広土・伊藤慎二編 2011 『先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～』
- 立神次郎 1986 『泉川遺跡－新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書－』鹿児島県教育委員会
龍郷町教育委員会 1986 『手広遺跡』※熊本大学考古学研究室（白木原和美氏）
- 樋泉岳二 2010 「奄美・沖縄における先史時代の脊椎動物利用」『考古学ジャーナル』3月号No.597
- 戸崎勝洋・長野真一 1987 『先山遺跡』鹿児島県大島郡喜界町教育委員会
- 長野真一・富田逸郎 1990 「第5節 まとめ」『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ』
鹿児島県教育委員会
- 中村友昭 2006 「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」『先史琉球の生業と交易2』熊本大学文学部
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子・上村俊雄 1996 「奄美地域における弥生土器の型式学的検討」
『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第44号別冊』
- 中山清美 1979 『手広遺跡 発掘調査終了報告－龍郷町教育委員会
- 中山清美 1983 「兼久式土器（Ⅰ）」『南島考古』8号

- 中山清美 1984 「兼久式土器（Ⅱ）」『南島考古』9号
- 中山清美 1988a 『下山田Ⅱ遺跡（東地区）』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 中山清美 1988b 「第四章 考古学上からみた龍郷町」『龍郷町誌 歴史編』
龍郷町誌歴史編編纂委員会
- 中山清美 1992a 「奄美における貝符と兼久式土器」『奄美学術調査記念論文集』
南日本文化研究所叢書 18、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 中山清美 1992b 『マツノト遺跡発掘調査概報』笠利町教育委員会
- 中山清美 1995a 『シンポジウムよみがえる古代の奄美「マツノト遺跡の発掘調査」』
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会
- 中山清美 1995b 『用見崎遺跡－長島植物園開発に伴う遺跡確認調査－』笠利町教育委員会
- 中山清美 1996 「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』－第4号－奄美考古学会
- 中山清美 2000 「奄美考古学研究の現状」『古代文化』第52巻 第3号、古代学協会
- 中山清美 2005 『安良川遺跡』笠利町教育委員会
- 中山清美 2006a 『マツノト遺跡』笠利町教育委員会
- 中山清美 2006b 「兼久式土器分類試論－奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に－」
『先史琉球の生業と交易 2』熊本大学文学部
- 中山清美 2008 「マツノト遺跡における兼久式土器の編年基準」『南島考古』第27号
- 名島弥生・安斎英介・宮城弘樹 2008 「南西諸島の炭素14年代資料の集成」『南島考古』第27号
- 西園勝彦 2009 『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 藤江望 1996 『用見崎遺跡Ⅱ－研究活動報告 32－』熊本大学文学部考古学研究室
- 松原明美 1983 『辺留窪遺跡－研究室活動報告 15－』熊本大学文学部考古学研究室
- 美浦雄二 1995 『用見崎遺跡－研究活動報告 31－』熊本大学文学部考古学研究室
- 森田太樹 2011 『揚殿遺跡』知名町教育委員会
- 弥栄久志 1984 『長浜金久遺跡－新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』
鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1987 『長浜金久遺跡（第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡）』鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1995 『長浜金久遺跡－新奄美空港に伴う埋蔵文化財報告書－』鹿児島県教育委員会
- 宮城弘樹 2000 「貝塚時代後期土器の研究（Ⅱ）－後期遺跡の集成－」『南島考古』第19号
- 宮城弘樹 2010 「目手久川嶺辻遺跡第5遺構面出土土器の位置付け」『川嶺辻遺跡』
- 宮城弘樹 2010 「貝塚時代とグスク時代」『考古学ジャーナル』3月号No.597